



〈歌・小説・日本語〉100

「百人一首」あれこれ 勝又浩

秋の田のかりほの庵いほの苫とまをあらみ
わが衣手は露にぬれつつ

知られるように「小倉百人一首」は天智天皇のこの一首から始まる。平安歌人たちはこの歌を天皇御製として誰も疑わなかったようだが、江戸時代ともなればそうはいかなくて、契沖その他、国学者たちの大方は疑義を提している。それらの諸説が今度読んだ久保田淳『百人一首』（岩波文庫）に詳しく紹介されていて、私のような門外漢には面白く、よい勉強にもなった。

ところで、私には、百人一首とは何だろうという素朴な疑問がずっとある。まず、何で百人なのか、であるし、そのなかで、なぜ万葉歌人は外すのか、である。さらに、天皇の他にも作者の

疑われるような作品もあるし、逆に作者は確かだとしても、なぜこの一首なのか、彼、彼女にはもつと優れた歌があるではないか等々、疑問は数々ある。であるのに、百人一首はいわば国の宝、誰もその存在を、価値を疑わないし、日本に生きていけば多かれ少なかれ、その影響から免れない。

私などは姉弟が無かったので正月の歌留多遊びも親戚や友人の家に行ったときくらいしかやらなかった。そのため百首を全て誦ずる機会もないままだったが、周囲には得意なやつもいて、頭の一字を聞けば直ちに全歌を言える者も珍しくなかった。

百人一首のこうした普及の仕方は、まあ江戸時代になってからのことであ

ろう。富山唯継のダイヤモンドの指輪が光る「金色夜叉」歌留多会の場面など思い出すが、ダイヤモンドは別にして、それはつい最近まで続いていた庶民のごく普通の光景だった。見方を変えれば百人一首は国民文化であり、生きた文化遺産でもあるわけだ。

そういう状態を、たとえば丸谷才一は、百人一首が日本人全体の文学観を支配していることになる、と言っている。正岡子規はそういうものと闘ったことにもなるが、面白いのは、萩原朔太郎の詩「旅よりある女に贈る」を全文引用して、この詩の発想は、「有馬山猪名のささ原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」（大式三位）からきているに違いない、という指摘（新々百人一首）である。萩原朔太郎が聞いたらさぞびっくりするだろう。しかし、そうであったとしても、丸谷才一の推理を否定するのも難しい。萩原朔太郎の文学観は彼自身が築いたかもしれないが、発想はそれ以前の、彼の積み重ねてきた文化的無意識から出ているからだ。

それが文化というものの性格である。

話が飛ぶが、弘法大師作という伝説のある「いろは歌」を、私はその語意を無視して途中のどこからでも言えるにほへと、へとちりぬ、るをわか等々である。実は一〇代のお終いに勤めたお役所の書類がいろは順に並べられていて毎日それを相手に仕事をしていたからなのだ。しかし、思い出せばそのころ、恥ずかしながら、いろは、が「色は匂へど散りぬるを」と、諸行無常思想を七五調の和語にしたものだと知らなくて、単純に五十音順の古臭い形だと思っていたように思う。

もう一つ、百人一首を、出だしの一音さえ聞けば、その後を全部言えた同級生と二十数年ぶりに会ったとき改めて訊ねると、彼は百人一首は今も暗誦しているが、「有馬山——」の作者「大式三位」が紫式部の娘だとは知らなかった。国民の血肉になっている文化、文化遺産などは、一皮めくってみればその実態はそんなものかもしれない。あるいは逆に、人々が意味も知らずに

知っている、使っているというレベルにまで行ったとき、それが本当のその国の文化なのかもしれない。

そんな反省もあって、これからは前記「百人一首」を手元に置くことにした。この一冊には関連歴史年表があり、全作者の略伝も付いている。初句だけでなく五句全部の索引があり、解釈解説には一句一語についての他例、既出歌もあげられている。百人一首の編者が藤原定家だとするのは伝承に過ぎないことは承知していたが、その点も解説では詳しく諸説を紹介、なぜそうだったかも考察して、いろいろ教わるどころが多かった。要するに百人一首ハインドブックの役割を果たしているのだ。

しかし、にもかかわらずだが、初めにも言った、ごく素朴な疑問が全て解消したわけではない。たとえば百人一首が何のために作られたのか、あまり理想的ともいえないこの日本短歌代表作集が、どうしてこれほど愛され、普及したのか、そのあたりの事情についてはとうとう分からないままだった。

そんなことを考えると、想起されるのはやはり冒頭に引いた天智天皇作になってしまった一首のことだ。これは明らかに歌謡が天子に結びつけられたものだが、言い換えると、人々はお気に入りの歌をお気に入りの天皇に、あるいは、そのとき必要であった天皇に重ねて喜んだり、お役めを果たしたりしていたのである。とすれば、こうした伝承現象は百人一首の全体についても当てはまるだろう。人々は当時人気のあった歌人たちの作を、やはり人気のあった大御所定家に重ねて納得したり安心したり喜んだりしたのである。そうやって「百人一首」というブランドが出来上がっていったのである。

＊
楽しかったり苦しかったりしながら無計画に続けたこの連載もとうとう一〇〇回になってしまった。良い区切りなのでここで一幕にしようと思う。素人の気ままな放言を寛大にお許し下さった本誌編集部、ならびに読者に改めてお礼を申し上げます。